人間探究（文学作品熟読）プログラムを振り返って

松島　欣哉（教育学部教授）

1. 人間探究（文学作品熟読）プログラム開設の意義および意図

香川大学ネクストプログラムの一環である人間探究（文学作品熟読）プログラムは、当時の上杉正幸教育改革担当副学長の肝入りで、教育学部の人文科学系の教員が中心となり構想された。他の二つのプログラムが、前頁の総括から分かるように、学生の将来の職業に直結した現実的プログラムであるのに対し、人間探究（文学作品熟読）プログラムは、「文学作品を読むことによって、刻一刻と状況の変化する現代社会を生き抜くしなやかな人材の育成を目指すプログラム」（香川大学のホームページより）として、謂わば、学生の全人・全生涯に関わる、人間形成・人格形成に資するプログラムという位置づけを持っていた。

本プログラムの名称を決定する際、上杉正幸元副学長は「人間探究プログラム」という名の許で、複数の図書を読み熟考するコースを考えておられたが、構想を具体化するなかで、本プログラムに関わった教員から、この名称では「人間科学」的な通俗的印象を与えかねないとの懸念が起こり、「人間探究（文学作品熟読）プログラム」という些か曖昧模糊とした名称に落ち着いた。

携わった教員には、学生たちの読書時間の減少傾向が指摘されるなか、いわゆる古典文学に触れて欲しい、現在の社会問題を自分ごととして引き受ける契機にして欲しい、卒業後にも続けられる読書習慣を学生時代に身につけて欲しい等々、様々な思いがあった。しかし、共通していたのは、短絡的に結果や効率のみを求める現今の思潮傾向に対し「否」の姿勢を取り、根本からじっくりと自分自身で思考する姿勢を身につけて欲しい、という切実な願いではなかったろうか。

2. 人間探究（文学作品熟読）プログラムの構成

2－1. 推薦図書の読破とレポート課題の提出

人間探究（文学作品熟読）プログラムに参加する学生には、香川大学の教員が推薦した図書のうち30冊を読破し、作品ごとに1,200字から1,600字（2013年度−2017年度）あるいは800字から1,200字（2018年度）のレポートを提出することを求めた。提出されたレポートには、学生の更なる読書の励みとなるよう、該当図書を推薦した教員からコメントを返してもらった。

推薦図書は本部役員および各学部教員から募った。「文学作品熟読」と名うってはいるが、寄せられた推薦図書には、文学だけにとどまらず、哲学、歴史学、社会学、芸術学、物理

学等、多岐に亘った。推薦図書は複数の冊数を用意し、中央館はもとより、創造工学部分館＊、医学部分館、農学部分館にも配置した。（＊ ただし、2017 年度までの学部名称は工学部である。）

過去 1 年間の推薦図書の冊数を示すと、以下のとおりである。

表 1　推薦図書の冊数

2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度
61	66	55	51	52	50

以下に、推薦図書とそのレポート課題の例を、いくつか挙げておく。

表 2　推薦図書とそのレポート課題（例）

推薦図書	レポート課題
遠藤周作 『沈黙』	この作品が問いかける問題の中で、あなたが最も強く感じた点について、自由に論じなさい。
カズオ・イシグロ 『日の名残り』	時代の変遷と個人の生き方のずれという観点からみたとき、スティーブンズの人生についてどう思うか論じなさい
新渡戸稲造 『武士道』	著者が説明した日本道徳（義、勇、仁、礼、誠、忠など）について、感じたことを自由に論じなさい。
V.E. フランクル 『それでも人生にイエスと言う』	あなたが持っている他人によって取り替えられ得ないかけがえのないもの、つまり、あなたの生活や生き続けることにおいて担っている責任の大きさを明らかにするものについて、レポートを書きなさい。

推薦図書は 6 年間をとおして推薦されたものもあれば、数年で取り下げられ新たに推薦されたものもある。

2－2. 関連授業科目

全学共通教育科目の主題科目の一部として、「人間探求としての文学－作品読解のために－」と題する授業を提供し、人間探究（文学作品熟読）プログラムを履修しようとする学生に、文学作品の読み方を講義した。この授業では、日本文学をはじめとして、ギリシア・ラテン文学、イギリス文学、フランス文学、ドイツ文学、アメリカ文学および中国文学の作品を対象とした。課題として、推薦図書のうち 3 冊を読みレポートを執筆することを求めた。

この授業を担当した教員は、以下のとおりである。池田恭哉（教育学部准教授）＊、佐藤慶太（大学教育基盤センター准教授）、田村道美（教育学部教授）＊、松島欣哉（教育学部教授）、最上英明（大学教育基盤センター教授）、山内玲（教育学部准教授）＊、渡邊史郎（教育学部准教授）（敬称略・順不同）。

（＊ なお、当時、授業をご担当いただいたお三方の現在の肩書きは、それぞれ次のとおりである。池田恭哉氏は京都大学大学院文学研究科准教授、田村道美氏は香川大学名誉教授、山内玲氏は東北大学大学院国際文化研究科准教授。この場を借りて、改めて感謝申し上げる。）

3. 人間探究（文学作品熟読）プログラムの実績

3－1. 登録者数および修了者

6 年間の登録者数は、以下のとおりである。

表 3　登録者数

	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度
教育学部	7	9	3	3	8	2
法学部	5	6	0	3	6	8
経済学部	2	8	0	4	8	6
医学部	2	7	4	0	7	8
創造工学部＊	7	3	1	9	5	11
農学部	3	0	0	1	0	0
合計	26	33	8	20	34	35

＊ ただし、2013 年度から 2017 年度までの学部名称は工学部である。

2018 年 10 月末現在、2013 年度に登録した農学部の学生（橋爪雅人くん）が、ただ一人、推薦図書 30 冊を読破しレポート課題も提出し、人間探究（文学作品熟読）プログラムを修了した。この学生は、卒業時（2017 年 3 月）に学長表彰を受けた。

3－2. レポート提出数

6 年間のレポート課題の提出数は、以下のとおりである。（2018 年 10 月末現在）

表 4　レポート課題の提出数

2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度
114	98	21	63	83	98

3－3. 推薦図書貸出し数

6 年間の推薦図書貸出し数は以下のとおりである。（2018 年 10 月末現在）

表 5　推薦図書貸出し数

2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度
121	177	94	279	390	300

2016 年度から貸出し数に劇的変化が見られたのは、前年度の 1 月から、人間探究（文学作品熟読）プログラム登録者以外にも、推薦図書の貸出しを開始したからだと考えられる。

3 － 4. 人間探究（文学作品熟読）プログラムの行事

2015 年 10 月 1 日（木）には、推薦図書の一冊である安部公房の『第四間氷期』を論じる読書会を、教育学部の渡邊史郎先生の主宰でおこなった。これは公の開催であったが、渡邊史郎先生は、個人的にも読書会を主宰された。以下に全てを纏めておく。

表 6　プログラムの行事

2015 年 10 月	安部公房『第四間氷期』
2016 年 5 月	安部公房『箱男』
2017 年 8 月	大江健三郎『性的人間』
2017 年 8 月	谷崎潤一郎『痴人の愛』
2018 年 5 月	太安万侶 編『古事記』
2018 年 5 月	安部公房『砂の女』

4. 人間探究（文学作品熟読）プログラムの終了にあたって

人間探究（文学作品熟読）プログラムは 2018 年度を以て閉じられる。人間探究（文学作品熟読）プログラム実施部会が建議した訳ではない。恐らく、このプログラムに予算を配分している部署が、「人間探究（文学作品熟読）プログラムは結果が出ていない、費用対効果が悪い、生産性がない」という評価を下したからであろう。

巷間、大学生は本を読まなくなったと喧伝されている。これは、大学入学以前から（受験に役立たない）本を読む習慣がついていないのが主な原因かもしれないが、本を読みたいとは思ってはいるが何を読めばいいのか分からない、という学生も多数いるのではなかろうか。

上記 3 － 1、3 － 2 および 3 － 3 の表が示唆しているように、我々が学生たちにどの本が読むに値するのかを示せば、彼らはそれに興味を持って手に取るだけの可能性を持っているのである。人間探究（文学作品熟読）プログラムは、登録学生に「人間探求としての文学－作品読解のために－」の授業で 3 冊の推薦図書を読むことを義務づけて来たので、最低でも登録者数の 3 倍の貸出し数があるのは当然である。ところが、プログラム登録者以外にも推薦図書の貸出しを始めると、2016 年度以降、貸出し数が劇的に増加した。

2017 年度の図書館ごとの貸出し数の詳細を、以下に例示しておく。

表 7　図書館ごとの貸出し数

2017	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
中央館	49	79	39	56	34	4	28	20	15	7	14	8	353
創造工学部分館	2	3	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	9
農学部分館	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
医学部分館	2	3	3	7	1	1	2	5	0	0	2	1	27
合計	53	86	45	64	35	5	30	25	15	7	16	9	390

我々大学人がなすべきは、短期的「効率」とか「生産性」などに振り廻されることなく、学生たちに全人教育を施すべく、読むに値する本を提示し刺激を与え続けることであろう。幸い、全学共通教育の授業には「書物との出会い」という授業科目がある。また、来年度から新ネクストプログラムの一環として、「ヒューマニティーズ（人文学）プログラム」が始まる予定である。人間探究（文学作品熟読）プログラムで目指したことの一端が継続させることを、切に願っている。

謝辞

上記の内容を纏める際に、渡邊史郎先生（教育学部）と三好正洋氏（香川大学図書館情報図書グループ非常勤職員）に大変お世話になった。ここに記して、感謝申し上げる。